

指定有形文化財
建 造 物

きゅういけながびじゅつかん

旧池長美術館 1 棟

所在地	中央区熊内町 ^{くもち} 1丁目377番地
所有者	神戸市
構造形式	鉄筋コンクリート造、3階建、陸屋根
建築年代	昭和11年(1936)6月起工、昭和13年(1938)5月竣工
建築面積	136.52㎡
設計者	小川安一郎
施工者	株式会社藤木工務店

旧池長美術館は、池長孟^{いけながはじめ}(1891～1955)が蒐集したコレクションを公開するために、昭和13年(1938)に建設された私立美術館である。昭和3年(1928)竣工の自邸紅塵荘^{こうじんそう}(中央区野崎通、平成27年(2017)解体)に近い熊内町に建築された。美術館の南側には自邸を、西側には附属倉庫(収蔵庫)を併設した。紅塵荘と同じく、設計は小川安一郎、施工は藤木工務店が担当した。

池長美術館は昭和15年(1940)に開館し、昭和19年(1944)まで毎年展覧会を開催したが、終戦後は接收された。昭和26年(1951)、所有していたコレクションとともに美術館は神戸市に移譲され、その後、市立神戸美術館、市立南蛮美術館として親しまれてきた。昭和57年(1982)、南蛮美術館は神戸市立博物館へ統合されることになり、3月に閉館したが、平成元年(1989)には神戸市文書館として改修・開館した。平成7年度末にその機能を終え、現在、兵庫区への機能移転が進められている。

建築主・池長孟(1891-1955)

池長孟は明治24年(1891)に兵庫に生まれ、生後すぐに兵庫門口町の旧家である池長通の養子となった。大正15年(1926)には上筒井町に住まいを移し、昭和3年(1928)、野崎通4丁目に自宅として紅塵荘(設計:小川安一郎、施工:藤木工務店、昭和21年(1946)売却、現存せず)を建築した。紅塵荘の竣工前から、長崎絵の収集を始め、それ以降「蒐集は創作である」との理念のもと、南

蛮美術の収集を進め、聖フランシスコ・ザヴィエル像や南蛮屏風をはじめとする一大コレクションを形成し、それらを公開する施設として美術館を計画した。蒐集品を私的に楽しむのではなく、「この宝物は皆様のもの」との考えを持っていた。

池長は、植物学者の牧野富太郎の援助者としても知られ、大正7年(1918)には、池長植物研究所を設立している。教育者としても、育英商業学校の校長を大正12年(1923)から昭和17年(1932)まで20年務めた。

池長美術館の建設

池長美術館は中央区(旧葺合区)熊内町、六甲山系の南麓部標高約63mの住宅地に所在する。建設当時は海岸部を臨むことができた立地環境である。敷地北側の前面道路(野崎線)には、昭和5年(1930)から市バスが運行を開始し、南側の東西道路原田線には神戸市電が運行していた。東約850mには、阪急電鉄神戸線の上筒井駅があったが、昭和15年(1940)に廃止された。昭和3年(1928)に竣工した自邸紅塵荘は、東方向約450mの位置にあたる。敷地は、北から南に傾斜する地形を造成したもので、南側隣地とは高低差が約4mあり、南に擁壁を備えている。東側には小河川の狐川が形成した谷部があり、西側は新神戸駅方向に向かって緩やかに傾斜する。

池長美術館は、昭和11年(1936)6月に起工、昭和12年(1937)5月23日に定礎式を行い、昭和13年(1938)5月25日に竣工式を挙行了。鉄筋コンクリート造地上3階建て、建築面積136.52平方メートル、延床面積395.00平方メートルの規模である。自邸紅塵荘と同じく、設計は小川安一郎、施工は藤木工務店である。

設計者・小川安一郎と施工者・藤木工務店

設計者小川安一郎(1882~1946)は、明治15年(1882)佐賀県に生まれ、明治40年(1907)に京都高等工芸学校図案科(現京都工芸繊維大学)を卒業し、住友本店臨時建築部に入った。住友銀行東京支店、大阪住友ビル、住友京都鹿ヶ谷別邸、住友倶楽部、住友銀行船場支店などの設計に関わり、昭和6年(1931)に退職した。その後、大林組工作部から発展した内外木材工芸株式会社技師長となり、大林組が携わった朝香宮邸、新大阪ホテル、大阪株式取引所などに関与したとされ、昭和12年(1937)に定年退職した。小川は装飾分野において目覚ましい活躍をし、意匠家としての技量が高く評価された設計者であった。またこの間、自宅において個人的な建築設計を阪神間の住宅建築を中心に40数件行い、

神戸市内では川田順邸、木水栄太郎邸、池長孟邸（紅塵荘）、池長美術館及び自邸などが在していたが、現存しているのは池長美術館のみである。

藤木工務店の創業者、藤木正一（1891～1967）は、住友本店臨時建築部工務課長を務めて独立した山本鑑之進工務店に勤務していたが、その事業を継承し、大正9年（1920）に藤木工務店を設立した。初期には日本銀行岡山支店、大原美術館などを建設した。小川安一郎と藤木正一は山本工務店勤務以前から知己であったようである。小川の設計、藤木工務店の施工で、木水栄太郎邸・大阪扁桃腺病院（大正15年（1926）・神戸市）、池長孟邸（紅塵荘）（昭和3年（1928）・神戸市）、肥田増雄邸（昭和初期・芦屋市）、寺井栄一邸（昭和5年（1930）・芦屋市）、今村幸雄邸（昭和6年（1931）・西宮市）、小川安一郎自邸（昭和8年（1933）・豊中市）、万城目耳鼻咽喉科病院及び住宅（昭和9年（1934）・大阪市）、日本メソジスト教会（昭和11年（1936）・芦屋市）、肥田昌三邸（昭和12年（1937）・芦屋市）、池長美術館（昭和13年（1938）・神戸市）などが実現したが、現存するものは少ない。

建物の特徴

（配置）

敷地中央北側に美術館を配置し、その南側に鉄筋コンクリート造（以下RC造）の自邸を、西側にはRC造の附属倉庫（収蔵庫）を併設していた。開館記念の絵葉書を見ると、西側の附属倉庫は美術館北壁より北に突出して配されている。建設時、敷地南側には神学校があった。美術館との間に鉄筋コンクリート造の自邸を配することで、神学校から出火した時のことを考え、防火壁代わりにしたとされる。蒐集した資料のことを考え、防火意識が極めて高いものであったことがわかる。

（平面）

竣工時の図面によると、左右対称のシンプルな平面形で、1階北側中央に玄関を設け、その南に矩形の陳列室を配する。玄関の左右には階段室を配し、2階陳列室との行き来に供される。2階には陳列室のほか、南側に館長室と貴賓室が設けられていた。2階陳列室南寄中央には、3階陳列室へ続く階段が配されている。3階南面には展望室（休憩室）があり、当時は眼下に神戸の街並みが見渡せたと考えられる。開館当時は観覧順路が明確に示されており、玄関を入り東側階段で2階へ上がり、2階陳列室東半分を観覧したのち、2階中央階段から3階へ上がり、反時計回りに観覧して再び中央階段で2階へ下り、2階陳列室西半分を観覧し、西側階段で1階へ下り、1階陳列室を観覧した。

(外観)

北面を正面とし、左右対称の平面に対応し、3階まではほぼ左右対称だが、西階段室上部に塔屋を設け、変化をつけている。北面および東西の階段室部分の外壁には薄い緑がかかったモザイクタイルを、中央の玄関回りの壁面には和泉産青石（砂岩）をタイル状に貼る。玄関前の2本の八角形の柱も同様の石材で仕上げている。2本の柱は高さが異なり、西側の八角柱は屋上パラペット上端まで延び、旗竿に見立てられ、旗に当たる部分には英字の建物名称（IQENAGA ART MUSEUM）が配されていた。玄関扉の上部鏡板には龍の浮き彫りがあり、ハンドルや下部の金属板にも控えめながら装飾が施されている。扉上部の壁面は額縁状に仕上げられ、当初は「池長美術館」と記されていた。この両側には噴水と花をモチーフにした装飾が、また西側の八角柱と壁面の間には帆船をあしらったグリルが嵌め込まれている。これらの装飾はアール・デコを基調とした意匠でまとめられている。玄関ポーチの天井は格天井で、そこに吊り下げられた縦長の照明器具も建設当初のものである。

美術館という建物の性格から、窓は多くないが、正面左右の階段室には1階から2階に達する細長い窓とその上部に六角形の窓、2階、3階の正面中央部に窓を横長に配している。窓の配置や窓格子の装飾、玄関西側のグリル装飾、玄関扉の装飾などは正面のデザインを特徴付けており、小川安一郎の力量が発揮されたものといえる。

(内部各室の意匠的特徴)

竣工時、1階陳列室内部には大理石貼りの6本の柱があり、南側4本は八角形の断面をもつ。床面は、当初クリンカータイル（1辺約20cm）が貼られ、中央部には八角形の小噴水が設置されていた。竣工記念の着彩絵葉書によれば、赤褐色の大判タイルに同系色のしま模様の大石柱、鮮やかな大理石タイルの噴水が特徴的な陳列室である。

内部の床は、主にタイルが用いられていた。北側左右の階段室の床面には長方形のモザイクタイル（25mm×52mm）が、2階、3階の陳列室の床面にも同色の赤褐色と褐色の2色のモザイクタイルが用いられ、市松模様状に仕上げている。部分的な劣化や補修痕が認められるが、ほぼ当初の仕様が現存する。2階陳列室の中央の柱2本は1階と同じく八角形の断面をもつ。2階北側4本の柱表面には床モザイクタイルと同系色のテラゾータイルが貼られていた。

2階南側の貴賓室は、床はチーク寄木貼り、壁も縞チークベニヤ板羽目、ストープを配した大理石と泰山タイルによるマントルピース風の棚があった。その上部にはモザイク壁画「ポセイドン」が設置されていたことが竣工記念絵葉書からわかる。館長室の床はモザイクタイル、壁はソーダスト蒔ペンキ塗りで、実用

性を重んじた仕上げと思える。館長室はトイレを介して貴賓室とつながっていた。現在、貴賓室・館長室部分のトイレや間仕切壁は撤去・改修され、一室になっている。

2階と3階を連結する中央階段は、左右から上り中央の踊り場で合流し、南へ5段上がり、再び左右に分かれる劇的な構成をとる。鉄製の手すりは細く繊細で、手すり子の途中には幾何学的な装飾が配され、また中央踊り場北面の手摺中央部には躍動感ある鹿のモチーフを配置し、アールデコ風の意匠で、控えめだが華やかな雰囲気を出している。

3階陳列室天井の中央には採光用のトップライトが設置され、また2階と3階の陳列室は中央の吹抜を介して明るく、一体的な空間である。吹抜直下の2階床にはガラスブロックが嵌め込まれ、トップライトの光が1階まで届くよう計画されていた。

3階の展望室（休憩室）は、南面に大きな窓が設けられている。床は陳列室より約14cm高く、テラゾータイル（約53cm×59cm）が貼られ、目地には金目地が使用されている。床周縁部には24mm角の磁器系の淡褐色のモザイクタイルが3列めぐり、巾木相当部分にも同寸法の淡褐灰色の磁器系モザイクタイルを4段に重ねている。現在は書庫として使用されているが、当初仕様が残っている。

池長美術館から神戸市文書館までの変化

昭和13年の開館後、5年間は展覧会が開催されたが、戦争の激化によって閉館を余儀なくされ、戦後はGHQの接収等により、池長美術館としての再開は果たせなかった。池長美術館起工から今日までの沿革をまとめると、以下の通りである。

【池長美術館建築～昭和20年】

年代	事項
昭和11年(1936)	6月 池長美術館起工
昭和12年(1937)	5月23日 池長美術館定礎式
昭和13年(1938)	5月25日 池長美術館竣工 ※池長孟「池長美術館」『博物館研究』13号(日本博物館協会、1940年)→建築費は10万円。 昭和13年7月5日の阪神大水害では被害を免れる。
昭和15年(1940)	4月1日 池長美術館開館 5月31日まで第1回展覧会を開催(入館者数1,616人) ※幸地貞子「池長美術館を視ての記」『黒船』17(8)(黒船社、1940年) →「屋根の上には赤い旗が風に流れてゐた」
昭和16年(1941)	4月1日 第2回展覧会を開催(～5月31日)(入館者数1,603人)
昭和17年(1941)	4月1日 第3回展覧会を開催(～5月31日)(入館者数1,571人)
昭和18年(1941)	4月1日 第4回展覧会を開催(～5月31日)(入館者数1,390人)
昭和19年(1941)	4月1日 第5回展覧会を開催(～5月31日)(入館者数1,129人)
昭和20年(1945)	神戸大空襲も被害を免れ、終戦を迎える。 ※『日本美術工芸』35号(同年12月)→「来春は従前の如く開館予定」と伝える。 ※『日本美術工芸』39号(昭和21年7月)→「進駐軍に接収されたため、当分開館の見込みが立たず」 ※『日本案内記 [第6] (近畿篇 下巻)』(昭和25年)→「進駐軍接収により現在休館」

【昭和 21 年～】

年 代	事 項
昭和21年(1946)	1月27日 池長美術館の土地200坪・建物103.3坪がGHQに接收され、神戸第8CIC(対敵諜報部隊)として使用される ※『神戸市史 第三集 社会文化編』1965年 ※『兵庫県警察史 昭和篇』兵庫県警察本部、1975年
昭和22年(1947)	2月22日 池長孟に財産税支払通知書が届く。同24年支払完了
昭和23年(1948)	12月31日 池長美術館、GHQの接收解除される ※同年8月、CICは芦屋市の山口邸に移転し、兵庫CICと改称 (『兵庫県警察史 昭和篇』兵庫県警察本部、1975年)
昭和25年(1950)	このころより池長は富裕税の支払開始
昭和26年(1951)	4月1日 池長孟、美術館の建物とコレクションを神戸市へ移譲 7月1日 市立神戸美術館として開館
昭和40年(1965)	4月1日 神戸市立南蛮美術館と改称
昭和57年(1982)	3月31日 神戸市立博物館への移転、統合に伴い閉館 11月3日 神戸市立博物館が開館
平成元年(1989)	6月 旧池長美術館を活用し、神戸市文書館が開館
平成12年(2000)	3月 神戸市景観形成重要建築物に指定

戦後、さまざまな困難のなか、池長孟はコレクションが散逸することを避けるため、約 4500 点のコレクションとともに、美術館を神戸市に委譲移譲することを決断した。昭和 26 年（1951）4 月に移譲され、7 月 1 日に市立神戸美術館として再開、また昭和 40 年（1965）には市立南蛮美術館と改称され、池長コレクションの公開を続けた。昭和 57 年（1982）には、神戸市立博物館が中央区京町に開館し、池長コレクションは博物館へ移管された。旧美術館の建物は、平成元年（1989）以降、神戸市文書館として利用されてきたが、平成 7 年（2025）3 月、新施設への移転のため閉館となった。

昭和 40 年（1965）の市立南蛮美術館への改称時と、平成元年（1989）神戸市文書館への用途変更時に、建物は大規模に改修された。文書館開館の際に、美術館の南側の池長自邸が解体され、跡地に文書館新館が建設された。西側にあった附属倉庫も現存せず、現在は駐車場になっている。また、昭和 48 年（1973）の年記のある図面で、北側道路の拡幅が描かれており、この頃までに北側敷地境界線が変更された。

文書館時代は、旧美術館 1 階を閲覧室とし、2 階、3 階は書庫として使用していた。2 階の館長室・貴賓室部分は大きく変わり、当初材はほとんど残っていないが、旧陳列室部分は旧状をよく留めている。3 階も同様に、展望室（休憩室）の壁面等は改変されているが、床材は当初材と考えられ、旧陳列室部分の階段や吹抜部分の手すり金物等もそのまま残る。1 階は文書館閲覧室としての用途に供するため、大きく変更された。玄関を入ると、閲覧室との間にエントランスホールがあるが、これは昭和 40 年（1965）の改修時に間仕切り壁を新設して設けられた。さらに昭和 62 年（1987）の改修時に、2 階旧貴賓室のマントルピース

上にあったモザイク壁画「ポセイドン」がこの間仕切り壁に移設されている。1階床はクリンカータイル貼りから合成ゴムタイル貼りに変わり、中央の小噴水も撤去された。

外観に関しては、昭和62年の改修の際に、大きな面積を占めていた青石のタイルには、腰壁石を除いて塗装が施され、玄関前の2本の柱にもマスチック塗装が施された。タイル貼り以外の壁面はモルタル刷毛引き仕上げであったが、こちらにもマスチック塗装が施された。

北西隅部の塔屋部分は、創建当初は倉庫であった。現在も外部から建物を眺めた時には変化なく感じられるが、昭和62年の改修時に東面と南面の壁が撤去され、現在は北面と西面の2面のみが残る。

開口部は機能上、鉄製サッシからアルミサッシに変更している箇所が多いが、形状や窓に付されたグリル等はよく保たれている。屋上中央部のトップライトは、昭和62年の改修時に鉄製からアルミ製のフレームに改修された。

【評 価】

神戸市への移譲後、外観でファサードの大きな部分を占めていた和泉産の青石に塗装が施されたものの、それ以外の部分は概ね当初の姿を留めている。平面形は左右対称ではあるが、外観では非対称に仕上げられたファサードが最大の特徴である。六角形の窓や玄関脇の南蛮船をあしらったグリルや各所に配置された植物をモチーフにした装飾など、アール・デコを基調としてまとめられ、常に新しい意匠を積極的に取り入れた設計者小川安一郎の力量を発揮したデザインが残されている。小川が設計に関わった建物は阪神間に約40件あったが、神戸市内に現存するのは旧池長美術館のみである。

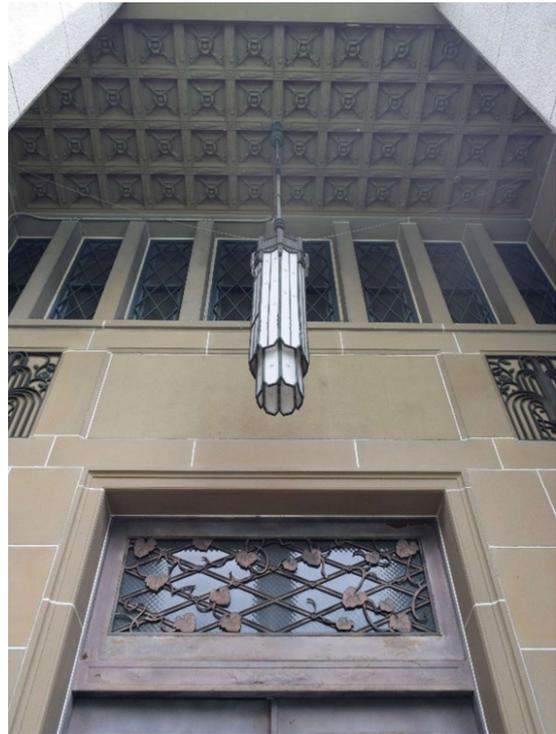
美術蒐集家として信念のある注文主・池長孟は、計画に積極的に関与したと考えられる。鉄筋コンクリート造を採用し、タイルを多用、可燃性の資材は極力避け、窓を少なくしたと池長は記録しており、池長の意見も取り入れられていたことがわかる。

神戸市への移譲後、市立神戸美術館、市立南蛮美術館や神戸市文書館として使用されてきた。昭和40年(1965)と昭和62年(1987)に改修工事が行われ、1階陳列室や2階の館長室と貴賓室、屋上塔屋は、当初の姿から大きく改変を受けた。一方、外観や2階・3階の陳列室、展望室は概ね旧状を留めている。

池長と小川により形を見た旧池長美術館は、戦前期神戸の近代建築を代表するものとして、また日本有数の南蛮美術コレクションを蒐集したのみではなく、それを公開しその価値を広く共有しようとした池長の業績を表現するものとして、神戸の歴史・文化を語る上で欠くことのできない重要な歴史的建造物であるといえる。



旧池長美術館外観（北東から）



玄関上半部装飾



玄関部柱とグリル



グリル装飾（帆船）